

梅鶯仏教壮年

第21号
2005年
4月9日

定期総会で 本年度の活動計画が決定

3月19日の定期総会（会員12名参加、2名欠席）で、平成17年度の活動計画が決定されました。本年度は新たに「除夜会（じょやえ）」も開催することとなりました。是非、一人でも多くの方のご参加をお待ちしています。

5月22日（日） 第1回例会

7月31日（日） 第2回例会

9月23日（金） 本願寺参拝
9月24日（土） 親睦旅行

11月19日（土） 仏壮報恩講

12月31日（土） 除夜会

1月22日（日） 第3回例会

3月18日（土） 定期総会

*本年度の例会では、「正信偈」をともに味わっていききたいと思います。
また、仏教讃歌の練習も続けます。

利他の精神 会長 北村喜代信



あれから10年経ってしまつた。東京の地下鉄サリン事件。私たちは、あの忌まわしい事件を風化させぬよう、再認識しなければなりません。東大、京大卒のいりせられたのは、彼らは真顔で「教祖は空中を浮ぶ」「ハルマゲドンがやってくる」と公言していた。日本の教育システムがいかに多くの「偏差値バカ」を生み出したかの証左であろう。自身で判断を下さなければならぬ。事柄までも、マニュアルがなければならぬ。対応できない人間を作り上げてしまつた。代社会は自由であり、物も豊かで生活には困らない。ところが、荒その環境が、息苦しく感じられ、荒唐無稽でもオウムの世界観の方が、現実社会よりもリアリティーを感じた。現代社会はカネ万能、企業中心主義がまかり通ってきたが、バブルの崩壊後、企業への信頼は揺らぎ、政治も窒息状態である。安んじたい、多くのニートと雇用不安に直面し、多くの経済大国が幻になる。若者達が出現し、経済大国が幻になる。

罪の増殖、尊属殺人と社会は確実に蝕まれていく。マツチをすればボーッと燃え上がるような土壌が、今の日本社会に出来上がってしまった。教祖の細胞には普通の人にはないパワーがある」という妄言にさえも、正視して思考しないまま話法に感服して付和雷同的に追従する。

教祖を組織の長に置き換えれば、オウムの世界だけに置き換えられ、土壌が自分の体内にはないだろうか？ ならぬままに何かに洗脳されていないだろうか？ 改めて自問自答する時思い出されるのが、仏壮例会で聞いた「真実の宗教とは」（会報第2号）の話である。真実の宗教は、全ての者が等しく平等に救われることが目的であるはずだ。仏教が説く「他者への思いやり、利他の精神」こそ、現代社会が求められているものではないでしうか。自分のあり方に痛みを感じるときに人の痛みを感じる心が開かれる



3月定期総会

題材法話

*前号からのつづき

「いのち」はなぜ尊いのか？ 改めて問うと難しい問題ですが、仏教が教えるところを、三つの側面からお話しします。

○私たちの命は一つです

まず一つめは、「私たちの命は、自分一人だけで生きているのではなく、時間的にも空間的にも、他の命と支え合い、つながりあっている」ということです。

例えば私たちの先祖を三十世代までさかのぼれば、実に10億人の祖先がいまいます。この10億人の人々の全ての縁を受け継いで、一人の私が存在しています。10億人の内一人欠けても今はもう奇跡といえません。これはもう奇跡としか云いようがなく、これが時間的なつながりです。



また、一つの生きもの命は、それだけでは生きられず、他の無数の命とかわり合いながら生きていくのだとお釈迦様は述べています。現代科学でも常識になっていく。これが空間的一体です。ここから、私達の命の重さ、尊さが出てきます。

○お釈迦様のご説法

二つめは、お釈迦様の説法を紹介します。ある国の国王パセナーイと妃マシュリ力は、共に人格を備え、国民からも慕われ、国もよく治まっていた。

ある時、国王が愛する妃に聞きます。「おまえにとつて、なにが一番愛おしいか」と。そこで正直な妃は、「王様も国民も愛していますが、やはり一番愛おしいと思うのは私自身です」と答えました。その時王様も、「妃よ、この私も常日頃から一番愛おしい」と答えます。



「と思うのは、私自身である。」「けれども、人より自分を大事に思うこんな心で良いのかと、いつも気にかけている」と告白され、二人して、お釈迦様にこんな気持ちをお話します。

○みんな自分が愛おしいのです

そこでお釈迦様は答えられます。誰も自分の命が一番大事であり、自分の命が一番愛おしいのです。それならば、他人もまた自分の命を一番大事にしていることに気づかなくてはならない。他人の命にも大切に考えられ、他人への優しさも出てくるんだよ」と。

仏教で他の命を殺めてはいけないという論理の原点がここにあるのです。私が自分の命を愛おしいと思うのと同様に、他もそれぞれ命を愛おしいことに気づくとき、愛することに気がつくとき、



互いの命を大切にしようという心、優しさが芽生えてくるのです。

○阿彌陀様に願われている命

そして最後の三つ目、実は、私たち念仏者としては、もつとも大切なことなのです。阿彌陀様から願われている命、南無阿彌陀仏という念仏の教えに出逢えたという念仏とは、私の命の生きていることが明らかになったという不安とあり、それは未知の不安にとざされた「死」が、実は浄土へ往生するということに気づくことなのである。

それは生きることの尊さであり、共に命を讃え合うことなのです。ここに最大の命の尊さがあるので

1月例会

住職法話より

